彦根城博物館だより 143

Hikone Castle Museum News
2023.12.1

テーマ展

龍 ―天翔（あまかけ）る霊獣―

2023年 12/14（木）〜 2024年 1/15（月）

能面 泥黒髭（でいくろひげ） 甫閑満猶（ほかんみつなお） 作
江戸時代 享保十二年（一七二七） 当館蔵

水底に住む水の神である龍神の面。「黒髭（くろひげ）」の名は、眉毛や口髭が黒々と表されることに由来します。下顎（したあご）を突き出したしゃくれた顔が特徴で、眉間に力を込めて目を見開き、舌先を覗かせ大きく口を開いた表情は、今まさにその力を振るわんとしているかのようです。彩色は通常、くすんだ黄土色あるいは暗い赤茶色ですが、この面のように全体を金泥彩色とするものは特に「泥黒髭」と称され、金泥の輝きがより一層、神秘的な印象を与えます。

この面は、鳥取藩池田家の旧蔵品で、近代に井伊家の所蔵となったものです。面裏の銘から、享保十二年（一七二七）七月に、喜多（き）流宗家の本面（ほんめん）を大野出目（おおのでめ）家の甫閑満猶が写したことが分かります。

展覧会情報

テーマ展
龍 ―天翔（あまかけ）る霊獣―
12月14日 ▼▼ 1月15日

特別公開
雛と雛道具
2月17日 ▼▼ 3月17日

テーマ展
数寄（すき）と清風（せいふう） ―井伊直亮（なおあき）の茶の湯と煎茶―
3月20日 ▼▼ 4月22日

展示案内

2023年12月〜2024年3月

常設展示

"ほんもの"との出会い

―彦根藩井伊家伝来の大名道具を中心に八〇点あまりを展示―

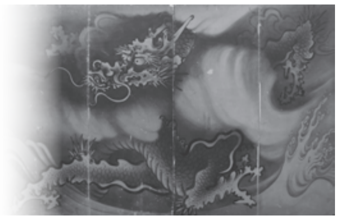
テーマ展 展示室1

12/14(木)〜1/15(月)

※12/25(月)〜31(日)は休館

龍 ―天翔る霊獣―

龍は、天に昇り雨を降らすとされる、古代中国に起源を持つ想像上の霊獣です。中国においては瑞祥の兆しとして崇拝され、後に皇帝の象徴ともなりました。日本でも、龍神として信仰されるとともに、めでたい存在としても尊ばれ、現在でも、特別な力を持つ存在として広く親しまれています。本展では、辰年にちなみ、龍を表わしたさまざまな作品を紹介します。



龍虎図(部分)

双龍図鐔

◎スライドトーク◎

■日時 12月16日(土)14時〜(30分程度)
■講師 茨木恵美(当館学芸員)
■会場 当館講堂
■参加費 無料
■定員 50名(先着順)

特別公開 展示室1

2/17(土)〜3/17(日)

雛と雛道具

江戸時代、大名家では、姫君の婚礼に際して、調度や雛道具などの道具一式を調えて婚家に持参する慣わしがありました。安政五年(一八五八)、井伊家十三代直弼の息女弥千代(一八四六〜一九二七)が、高松藩松平家世子頼聡に嫁いだ際にも、大揃えの婚礼調度とともに、雛と雛道具が調えられました。

本展では、弥千代の雛道具を、地元の旧家に伝えられた古今雛や御殿飾りとともに一挙に公開します。桃の節句にふさわしい華やかな雛の飾りをご覧ください。

弥千代の雛道具

◎スライドトーク◎

■日時 2月17日(土)14時〜(30分程度)
■講師 奥田晶子(当館学芸員)
■会場 当館講堂
■参加費 無料
■定員 50名(先着順)

テーマ展 展示室1

3/20(水・祝)〜4/22(月)

数寄と清風 ―井伊直亮の茶の湯と煎茶―

彦根藩井伊家十二代直亮(一七九四〜一八五〇)は、茶の湯や煎茶に造詣が深く、道具や茶書を積極的に収集しています。また、御茶座敷や待合の新築にあたっては、幕府の茶道役に自らが仕様について尋ね聞くなど、積極的に関わり、彦根の槻御殿には煎茶室も建立しました。これら直亮の事跡は、十三代直弼の茶の礎ともなっています。

本展は、井伊直亮の茶に初めて焦点をあてて紹介するものです。

唐物鶴首茶入

紫泥六角水注

◎スライドトーク◎

■日時 3月23日(土)14時〜(30分程度)
■講師 髙木文恵(当館学芸員)
■会場 当館講堂
■参加費 無料
■定員 50名(先着順)

資料紹介

側役日記 ―「殿様の日常」の記録―

「殿様の日常生活」をテーマとし、当館学芸員と外部研究者が共同で行っている彦根藩資料調査研究会では、側役の日々の業務の記録「側役日記」(彦根藩井伊家文書)の分析を進めています。側役は、殿様と家来を取り次ぎ、殿様の外出に同行するなど、殿様の側近くに仕えて政務の補佐を行った役職です。

「側役日記」は、井伊家十代当主直幸期のものを中心に、五十冊以上が当館に伝来しています。殿様の起居や外出だけでなく、年中行事の様子、家族や他大名との手紙や贈答品のやり取り、家臣の伺いに対する指示など、殿様のさまざまな活動が窺えます。殿様が日々どのように過ごしていたのかを知るための基礎的な史料です。

3月24日(日)に開催する公開シンポジウムに合わせて、2月17日(土)〜4月22日(月)の期間、展示室6にて展示します。

側役日記

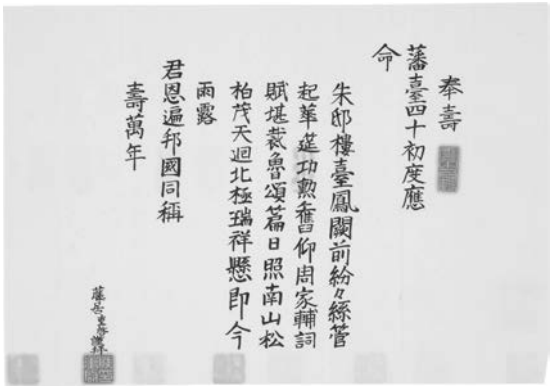
研究余録

金亀玉鶴

井伊直中の四十歳を祝う漢詩を呈した人々

写真は、文化二年（一八〇五）に藤居重啓という人物によって書かれた、井伊家十一代直中の四十歳を祝う漢詩です。日本では古くから、四十歳から始めて五十、六十…と十歳ごとに長寿を祝う算賀という風習があり、四十歳は一際めでたい年齢でした。

一見不思議な文字配置に見えますが、それは、敬意表現として、敬う相手やその人の行為を表す文字を、改行して行頭に配置したり、それよりさらに一字分高く配置したりしているためです。最初の三行で「命に応じて藩主の四十歳を祝います」と前書きし、その後に七言律詩を記しています。南山を日が照らして松柏が茂る（中国古典を踏まえた長寿を祝う言葉）、君恩は雨露のように遍く行きわたり、国の人々は藩主の万年の寿を祝う、などの言葉で賀意を表しています。


奉壽
藩臺四十初度應
命
朱邸樓臺鳳闕前紛々絲管
起華筵功勲奮仰周家輔詞
賦堪裁魯頌篇日照南山松
柏茂天廻北極瑞祥懸即今
雨露
君恩遍邦國同稱
壽萬年

藩台四十初度寿詩

井伊直中の四十歳の祝いの漢詩は、藤居重啓以外の人からも呈せられ、現在、一五〇枚が一箱に収まって伝わっています。呈した人を大まかに分類すると次のようになります。

徒以上の彦根藩士	六〇
彦根藩足軽（手代を含む）	一三
藩に属する武家奉公人	三
陪臣	一〇
僧侶	二六
村人・町人	二〇
不詳	一八

彦根藩士のなかには、儒学者の龍世華のように、学問・文芸の面で知られた名前も見られますが、そうでない藩士の名前も見られます。武士にとって漢文は基本的な教養だったので、漢詩が作れるのは不思議ではありません。ただ、その方面で有名でない人の漢詩が見られるのは珍しい例です。また、足軽などの下層の武士がどれほど漢文ができたのか、実態把握は難しいところですが、武家奉公人や陪臣も含め、漢詩を作れる人が少なからずいたことがここから分かります。

僧侶では井伊家の菩提寺清涼寺の僧、漢三道一などが漢詩を呈しています。中世には漢文学の中心は禅宗の僧だったこともあり、僧侶も学問のある人が多いと見られます。村人・町人も、私塾などで学ぶことができたので、漢詩を呈した人はそのような人かと思われます。

さて、冒頭の藤居重啓は、彦根藩主の命を受けて琵琶湖とその水域の生物について記した「湖中産物図証」を製作した人物としてその名が確認できます。ただ、先の分類では不詳に数えた一人です。

というのも、藤居重啓の漢詩には包紙があり、そこに「（彦根藩士の）木村勝左衛門の屋敷に住んでいる、坂田郡相撲村の（村人の）吉蔵」ということが書かれているのです。まったく別人に見えるのをどう理解すればよいかはっきりしないのですが、現時点では「壱人両名」だと理解しています。江戸時代には、一人の人物が二つの名前を使う事例がしばしばあり、職業上で別名を名乗るのは可能で、これを「壱人両名」と言います。今回の事例では、相撲村の吉蔵は、琵琶湖水域の生物の学者としては藤居重啓を名乗っている、ということになります。

このことの当否は置いておいても、漢詩を呈した人々には、さまざまな人物が集まっていることが分かります。見方を変えると、漢詩をつくる文化の広まり方が具体的に分かる事例でもあります。

（早川駿治）

◉臨時休館のお知らせ◉

当館の中央には、由緒ある江戸時代の能舞台が建っています。能などの際には客席との間にあるガラス戸を開け、江戸時代さながらの開放的な空間で、舞台をご覧いただける造りとなっています。今回、外気の流入を防ぐスライディングウォールをリニューアルして、展示室への影響をより一層減らし、舞台を活用しやすくする工事を行うことになりました。工事中は左記の期間臨時休館となりますので、ご理解ご協力をお願いいたします。

■令和5年（2023年）
11月7日（火）
～12月13日（水）
■令和6年（2024年）
1月16日（火）
～2月16日（金）

能舞台

◉開館記念日くじびき◉

彦根城博物館は、令和六年二月十一日に開館三十七周年を迎えます。今年度は当日が工事により休館となるため、左記の日程にて開館記念日のイベントを開催します。イベントでは、博物館オリジナルグッズなどの記念品をくじびきにて贈呈いたします。ご観覧と併せて、ぜひご参加ください！

■日　時　1月8日（月・祝）
8時30分～17時
（記念品が無くなり次第、終了）
■会　場　当館講堂
※くじびきへの参加は、ご観覧の方のみとさせていただきます。
※記念品の内容は、当日の公開となります。

スケジュール 12月～3月

12月

11／7火～12／13水　休館

16土　スライドトーク　龍

25月～31日　休館

テーマ展
龍
―天翔る霊獣―
12/14 ～ 1/15

1月

8 月・祝　開館記念日くじびき
※本来は2／11ですが、休館のため1／8に行います

13土　講座　私の研究最前線「彦根藩領の湊と船」

1／16火～2／16金　休館

2月

17土　スライドトーク　雛と雛道具

24土　講座　私の研究最前線「石黒務」

特別公開
雛と雛道具
2/17 ～ 3/17

常設展示“ほんもの”との出会い

3月

9土　講座　私の研究最前線「『暮物伺』から見た彦根藩武家奉公人の実像」

16土　講座　私の研究最前線「井伊直忠の能稽古と梅若家」

18月～19火　休館

23土　スライドトーク　数寄と清風

24日　彦根藩資料調査研究会 公開シンポジウム

テーマ展
数寄と清風
―井伊直亮の茶の湯と煎茶―
3/20 ～ 4/22

催し

◉講座 私の研究最前線◉

■日時・演題・講師

①1月13日（土）14時～15時30分
「彦根藩領の湊と船
―船役所の機能を中心に―」
荒田雄市（当館学芸員）

彦根藩船役所は藩領内の湊や船、漁業などの支配に当たっていました。その職掌・機能や湊の様相について、御水主であった磯崎家に伝わった古文書などから考えます。

②2月24日（土）14時～15時30分
「石黒務―明治に活躍した旧彦根藩士―」
早川駿治（当館学芸員）

明治期に福井県知事等の地方官僚を勤めた石黒務（一八四〇～一九〇六）は、他方では井伊家等に関わる資料の収集・考察をしていました。その足跡をさまざまなところに残す彼の人物像を紹介します。

石黒務

③3月9日（土）14時～15時30分
「『暮物伺』から見た彦根藩武家奉公人の実像」
柴﨑謙信（当館学芸員）

彦根藩各役所の武家奉公人の昇給は、年末に目付から藩主に提出された「暮物伺」という書類をもとに実施されました。この人事手続に見える彼らの実像を紹介します。

①～③共通事項
■会　場　当館講堂
■定　員　各50名
■資料代　各１００円
（彦根市内在住の中学生以下は無料）
■受　付　当日受付
（先着順、受付13時30分～）

暮物伺

◉彦根藩資料調査研究会 公開シンポジウム◉

当館では「殿様の日常生活」の解明に向け、当館学芸員と外部研究員による共同研究を令和三年度より五カ年計画で進めています。計画の中間年度にあたる今年度は、井伊家十代直幸の日常を支える家臣たちに焦点を当てた公開シンポジウムを開催します。殿様の政治的行為や外出など、これらはいつ誰が計画し、準備していたのか、また当日の殿様の行動を誰がどのように支えていたのかなど、「側役日記」から見える殿様の日々の政務を徹底解剖します。

■日時・テーマ
3月24日（日）13時～16時30分
「殿様と家臣たちの日常―「側役日記」から見る井伊家十代直幸の政務―」
■会　場　当館能舞台正面見所
■報告者　3名
（当館学芸員および外部研究員）
■受講料　５００円
■定　員　１００名
■受　付　当日受付
（先着順、受付12時30分～）

◆休館のお知らせ◆

施設整備等のため休館いたします。ご迷惑をおかけしますがよろしくお願いいたします。

【休　館】11月7日（火）～12月13日（水）、12月25日（月）～31日（日）
1月16日（火）～2月16日（金）

編集・発行
彦根城博物館
〒522-0061　滋賀県彦根市金亀町１番１号
TEL 0749(22)6100　FAX 0749(22)6520
https://hikone-castle-museum.jp/

Hikone Castle Town
彦根城を世界遺産に